貧しかった学生時代 (※1)

併設中学校第１回卒　佐藤　ハマ子 (※2)

昭和 20 年中村第二国民学校の６年生を卒業し中村高等女学校（４年制）に入学する道が開かれた第１回生として入学することになった。

入学当初の学校名は中村女子商業学校だったと覚えている。私たちは一部の生徒としての入学だったが、外に高等科を卒業して入学した二部の生徒もいてこの二部の人は２年で卒業する制度だった。

商業学校だった為か毎朝校内放送でソロバンの練習があり珠算大会があって競い合ったものだ。
戦争末期に入学したので校名変更になり校章も変り終戦になった。
その後学制改革があり校名も中村高等女学校３年生の中学卒業生として、そのまま実社会に出た人が大部分であった（併中２回卒業生となった)。

その後、新制高等学校が誕生したので進学したのは昭和 23 年のことだった。今度の学校は新地高等学校中村分校が併置され家庭科別科１年生としての入学だった。校舎は県立相馬女子高等学校に先生方といっしょに移り勉学を続けた。２年生で新地高等学校卒業という卒業証書をいただいている。昭和 25 年卒業で 47 名の同級生であった。

戦後の混乱期に学校名も、学制も次々に変更になり入学当初の友達も卒業まで一様ではなかったけれど、希望に向って就職・進学とそれぞれの道に別れ別れになったわけである。

入学当初の服装はヘチマ衿の制服に白い掛衿をかけた国民服だった。ズボンの裾はカフスのボタンでしめていた。履物は運動靴か下駄履きといういでたちだった。
高校に進学してからセーラー服にネクタイという服装に変わっていた。

そろそろ物のない時代からの抜け出しの時代になっていたのであろうかと生徒の頃を思い出している。

（※１）『 相中相高百年史 』 〈 1998（平成 10）年７月６日発行 〉「第一部 第三章　中村高女」より。

（※２）佐藤ハマ（会員名簿)。中村出身。昭和 23（1948）年卒。

二十一世紀への心配 (※1)

併設中学校第１回卒　佐藤　文子 (※2)

終戦の年の春に入学したが、戦争の真只中の勉強は、本を開くこともなく毎日が、挺身隊として原町飛行場で、整備や防空壕掘り、出征兵士留守宅の稲刈り作業などの連続だった。ほかに、防空壕の屋根にする松の木運搬等の重労働も……。

なにせ食糧難の時代のため、かじめを入れたおかゆ、大根葉を入れたおかゆなど、今の子供達にこんな話をしても、何の感情ももてないだろう。今は、金余り時代で、物が豊富すぎて、金さえあれば何でも手に入る時代だ。

やがてむかえる 21 世紀は、かつてのどん底から、今、将来とどんな風にこの世の中変わるだろうか。身の毛がよだつ思いがするばかりである。
そこで失うものがないだろうかと……。

(※1)『 相中相高百年史 』 〈 1998（平成 10）年 7 月 6 日発行 〉「第一部 第三章　中村高女」より。

(※2) 旧姓 坂田。磯部出身。昭和 23（1948）年卒。

（ 転記&※脚注　村山 ）